

2015.11.15 年間第33主日

人の子の出現は、だれにでも分かるしかたでなされる

マルコによる福音 13:24-32

(そのとき、イエスは弟子たちに言われた。)

「それらの日には、このような苦難の後、

太陽は暗くなり、

月は光を放たず、

星は空から落ち、

天体は揺り動かされる。

そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。

いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。はっきり言っておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」

説教

教会の暦では年間最期の三つの主日（第32、33、王であるキリストの祭日）は「終末主日」と呼ばれています。きょうは最期から二番目、マルコ福音書としては最終回になります。終末と聞くとおそろしいのですが、「世の終わりの救いの完成」＝「終末」とキリスト教では考えられていて終末は喜びの日です。ふつうの感性では世の終わり、世界の終わりは消滅であり滅亡です。しかし、それが救いの完成、キリストの再臨のとき、それが主の日だ、という考え方は、ちょっと屈折した感覚でまったく理解できないことはないのですが、

なかなかわかりにくいところでもあります。

さて、きょうの聖書箇所はマルコ福音書の13章のおわりの箇所です。マルコの13章は小黙示録ともいわれます。（大黙示録は新約聖書の一番最後にあるヨハネの黙示録です）黙示録（もくしろくと読みます）とはギリシア語ではアポカリプス、「覆いを取り去る」「隠されていたものが明らかにされる」という意味です。啓示、預言と同じような内容ですが、特に終末についての啓示・預言を黙示と呼んでいます。

マルコ福音はその終末の様子を簡潔にこう述べています。

「それらの日には、このような苦難の後、／太陽は暗くなり、／月は光を放たず、星は空から落ち、／天体は揺り動かされる。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」マルコ13:24-27

「それらの日には、このような苦難の後」とはマルコの13章の1節から23節までに書いてある内容です。神殿は崩壊し、天変地異がおこり、大弾圧がおき、にせ預言者が出沒する、そうになったら逃げろ、この苦難の日々は主が縮めてくださる。にせキリストに惑わされることなく逃げて人の子の出現を待て、ということが啓示、黙示されています。「太陽は暗くなり…呼び集める」ということが最期に起こる、というのがきょうの聖書箇所が語る終末です。

ふつうに、というか黙示に関する信仰理解が浅ければ、たわ言にしか聞こえません。さて、黙示の理解度を深めるために補助線を引いて見ます。

補助線 1

杞憂（きゆう）ということばがあります。古代中国の文書（出典は『列子』）に由来する日本語です。

「杞憂」とは取り越し苦労をすること、無用の心配をすることをいい、杞人の憂（うれい）ともいいます。

由来は昔、杞の国のある男が、天が崩れ落ちてくるのではないかと心配し、食事ものどを通らず、夜も眠れずにいた。それを心配した友人が、『天は気が固まってできているので、絶対に崩れることはない。』といて安心させようとした。しかし男は、『それなら月や星が落ちてきたらどうなるのだろうか』とまた心配するため、再び友人は『月や星も気が固まっているだけなので、落ちてきても怪我一つしない』と説明し、ようやく杞の国の男を安心させた。（Yahoo 知恵袋より引用 http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1012303800）

この故事にあるようになんか説明を受けて納得してしまう、という感性が東洋にはあるようです。マルコ福音書では墮ちてくるぞとっている天ですが、平気へいきと中国人は考えます。そしてそれをとりこし苦労だと言い切ります。わたしは日本人ですが、基本的にはこの感性、感覚で育ってきているのでキリスト教思想の黙示に関してちょっと考えすぎじゃないの？というちゃちゃを（実のところをいえば）いれたいくなります。

補助線 2

3.11 東日本大震災が起こり 4 月上旬福島に友人を見舞いにいきました。避難先の公民館にいる友人に流された自宅や町に案内してもらい、彼らがそのとき一時避難した土手でこんな話を聴きました。おおきな揺れを感じたのですぐに津波を心配した。家族がばらばらにならないように一台のクルマに乗って（飼い犬も）この土手に非難した。家が町が人が津波に呑みこまれていく様子がここから見えた。何時間かたつてのことだとおもうが、津波がおさまった時、とつぜん空が暗くなった。まるで太陽がなくなったように感じた。その状態はしばらく続きやがてまた明るくなった、と彼は話しました。にわかには信じられなかったわたしは避難所に戻ってから夕餉の支度をしていた彼の奥さんに確かめたところ信じられないけれど暗くなったのだと彼女も同じ証言をしました。

補助線 3

20代のころ読んでいた作家、島尾敏雄のことがふと浮かびました。本のタイトルか帯だったかは忘れましたが「日常の中の非日常」というコピーがあったように記憶しています。島尾敏雄は九州大学の学生から士官となり

「第十八震洋特攻隊隊長として、奄美群島加計呂麻島に赴任。1945年8月13日に特攻戦が発動され、出撃命令を受けたが発進の号令を受けぬまま即時待機のうちに終戦を迎える」（ウィキペディアより引用）

という経歴をもつ小説家で、戦後1956年にカトリックの洗礼を受けたキリスト教信者です。彼の小説を始めて読んだ時はなんだかわからなく、ゾッとするものを感じただけでしたが、彼の小説のテーマになっているものはひょっとして黙示だったのかもしれないなあ、ときよの聖書箇所を読んでいて想いました。

補助線 4

わたしが福音主義系の神学校に寄宿していたとき、韓国からの留学生の女生徒とおしゃべりをしていて驚いたことがあります。聖書で一番好きな書はなにかという話になり、彼女（まだ20代）がためらわずにヨハネの黙示録といったことです。東洋人の感覚では黙示録はよくわからない、おどろおどろしい書、という印象を持っていたわたしは若い女性から黙示録が好きと聞いて、びっくりしたわけです。一からげに東洋人は黙示が苦手というわけではないようです。

人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る。マルコ 13:26

稲妻が東から西へひらめき渡るように、人の子も来るからである。マタイ 24:27

一年間読み進めてきたマルコの福音も今回で最終回となります。さいごにこの質問でおしまいになります。どうぞ楽しみながら考えてみてください。

キリストの再臨がいま起きるとしたら、どんな様子で、どこの場所に、何時ごろ、何曜日に再臨されるとおもいますか？

* 参考までにわたしの答え（模範解答ではありません）

再臨の様子はテレビ中継される、たぶんエルサレム神殿跡（いまの岩のドーム）、グリニッジ時間のお昼 12 時（エルサレムなら午後 2 時、東京ならば午後 7 時）、日曜日かなあ？
